



歌舞伎舞踊の名作をたっぷりと

第21回「上方花舞台」

2021年9月3日・4日・5日／国立文楽劇場

企画：阪口 純久

構成・演出：藤間 勘十郎

撮影：©越田 悟全

当協会の上方面文化芸能運営委員会は、上方面文化芸能の伝承と振興に力を注いでいます。今回の「第21回『上方花舞台』」は、3日間で3回公演、コロナ禍で人数を制限しながら約1,000人の皆様に歌舞伎と日本舞踊の競演をお楽しみいただきました。

華やかな菊の精

きく

「菊」

一人の少女の成長を様々な菊の花に託して描き、禿(幼女)、町娘、御守殿、田舎娘を踊り分ける『娘道成寺』の菊版といった作品です。初演は昭和6(1931)年(初代吾妻徳穂)で、昭和34(1959)年には尾上梅幸が新橋演舞場にて、六世藤間勘十郎の振付で自身初の上演を行いました。その後、平成10(1998)年に新たに三世藤間勘祖の振付により再演。今回はこの時の構成をもとに、一人の娘の成長ではなく、菊の精の華やかな姿を描く構成で中村梅枝が演じ、短い曲の中にも秋を感じる華やかな舞台となりました。

花の精が酔う

ふじ むすめ

「藤娘」

大津の絵師 浮世又平の描いた人物が絵絹を抜け出し踊る趣向の作品から、昭和12(1937)年に六代目尾上菊五郎がその中の人物「藤娘」を独立させたもの。役名も「藤娘」から「藤の精」と改め、従来曲に岡鬼太郎作詞の「藤音頭」を加えました。六代目菊五郎の体を娘のように小さく見せる美術構成や六世藤間勘十郎の振り付けが好評で、今ではこれが演出の主流です。

藤に酒を与えると色良い花が育つという言い伝えと、娘が初めて酒を飲んで酔う姿を重ねた「藤娘」は、音羽屋のお家芸。「花の精が酔う」という口伝が残されている名作舞踊を、尾上菊之助が好演しました。



中村梅枝



尾上菊之助

一人5役・華麗な変化舞踊

ろっかせんすがたのいろどり

「六歌仙容彩」

平安時代の和歌の名人6人を徹底的に洒落のめした歌舞伎変化舞踊の名作。日本美人の小野小町をめくり5人の男性が皆ふられるという物語で、この5役を一人の演者が踊り分けました。はじめに登場するのは、元良峯少将宗貞で小町の恋人だった僧正遍照。宗家藤間流の振付により、小町の僧正遍照への一番強い想いが表現されました。そして官女達を相手に艶やかな吉原情緒を魅せた文屋康秀、平安貴族の色模様を描いた業平、茶汲み女を相手に色模様からチョコクレ(門付芸)まで踊る喜撰法師へと続き、最後は天下転覆を企む大伴黒主とそれを見破る小町との争いが、能「草紙洗小町」の趣向で描かれました。尾上菊之助と中村梅枝による初の通しで、顔見世舞踊の醍醐味溢れる舞台となりました。



尾上菊之助(大伴黒主)

日本の文化に親しむ

「町人文化を味わう」

2021年10月21日／

三輪明神 大神神社・三輪山会館能楽堂

コロナ禍によって度々延期していた大神神社(奈良県桜井市)での能の鑑賞を、ようやく実施することができました。

鑑賞に先立ち、参加者全員で大神神社に参拝したあと、大神神社の第二期大造営事業によって竣工した三輪山会館の中にある能楽堂へ移動。ここの能舞台は、大阪南地の料亭大和屋にあったものを移築したもので、松の鏡板は人間国宝の前田青邨(1885～1977年)によるものです。この能楽堂で大槻文藏の能「羽衣」と茂山家による狂言「千鳥」を鑑賞しました。

『羽衣』は各地に伝わる羽衣伝説がモチーフ。三保の松原に住む漁師が天女の羽衣を見つけ持ち帰ろうとしたところ、それを返してもらうために天女が舞を舞い、富士の空へと姿を消していく物語です。人間国宝の大槻文藏がその美しさと儚さを表現し、参加者を惹きつけました。『千鳥』は、主人から酒を買ってくるよう命じられた太郎冠者が、お金がないため酒屋のすきをついて樽を持ち帰ろうとする話。酒屋と太郎冠者の滑稽な駆け引きを茂山七五三と茂山逸平が演じました。



『羽衣』大槻文藏



『千鳥』茂山逸平(左)、茂山七五三(右)